

農業と科学

1979
9

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO., LTD.

クルメツツジと

サツキとコーティング肥料

野菜試験場久留米支場
花き育種研究室長

国重正昭

はじめに

サツキ・クルメツツジの盆栽用の苗木の栽培は、鹿沼土・マサ土・ピート等、各種の用土を用いてポット育苗されている。

サツキにおいては、挿芽から鉢上げまで、用土は一貫して鹿沼土が使用されている。鹿沼土は元来、肥料分を含んでおらず、磷酸吸収係数も非常に高く、そのままでは育苗すると、十分に生育をさせることはできない。

慣行の施肥方法としては、油粕を置肥の形で施用しているが、油粕の肥効は大体1ヶ月ほどしか続かず、月1回の施肥は、労力的にかなりの負担になっている。

一方、通常の化成肥料の施用は、急激な塩類濃度の上昇による根いたみの原因となるので、使用にあたっては充分に注意することが必要である。

したがって、定植前に土中に混入できて、しかも肥料の持続性があり、そのうえ濃度障害がおきない肥料があれば、非常に便利である。そういう観点から、コーティング肥料のツツジ・サツキの盆栽用苗について育苗時の施肥試験を行った。

処理区の構成と試験

処理区の構成は、表-1、表-2のとおりで、慣行の油粕置肥、油粕の土壌混入、コーティング肥料の土壌混入の各区について、土壌の種類を変えて試験を行った。

鹿沼土は2mm目のふるいでみじんを除き、更に1cm目のふるいを通して、大粒を除いたものを使用した。鹿沼土と山砂の混合割合は1:1の容積比である。マサ土は久留米附近にある花崗岩の風化土であり、当試験場での標準鉢用土として、マサ土を2、ピートを1、パーライトを1の容積比で混合したものを用いた。

肥料は、鉢上げ前に用土の中に混入しておいた。表中にある肥料の量は、用土20ℓ当たりの混入量である。試験に供した苗は、クルメツツジは今猩猩、サツキは暁天の品種を用い、いずれも、高さ10cm前後の挿木1年生苗

を使い、9cmポリポットに、それぞれの用土を用いて鉢上げした。

クルメツツジの場合

クルメツツジとサツキでは、多少試験の方法が異なっていて、クルメツツジでは、4種類の用土、サツキでは3種類の用土を使用した。

また、クルメツツジは一般にサツキに比べ、肥料による障害を受けやすいので、施肥量もサツキより少なくなした。

鉢上げの時期は、クルメツツジが9月7日、サツキが11月4日であった。結果は表-1、表-2に示すとおりである。

クルメツツジの場合、コーティング肥料は鹿沼土、鹿沼土+山砂のように、排水が極端によく、肥料の流亡のはげしい用土では効果が高く、本試験の施用量の範囲では、混入量の多いほど、枝の伸び量は多かった。

ただし、60g/20ℓ区では、根いたみによると思われる、軽度のクロロシスもみられたのと、比較的排水の悪いマサ土を用いた用土では、多量に混入した区で障害がみられたので、クルメツツジの場合の施用量は、鹿沼土

<目次>

- § 花木生産とコーティング肥料……………(1)
野菜試験場久留米支場 国重正昭
花き育種研究室長
- § シクラメンの栽培とコーティング肥料……………(3)
宮城県園芸試験場 児玉きえ子
花き花木科
- § 高冷地のカーネーションとコーティング肥料……………(5)
長野県・上伊那農業改良普及所 大平民人
- § 菊の栽培とコーティング肥料の利用……………(7)
静岡県富士市柳島 村瀬長生

表一 クルメツツジ(今猩猩)に対する施肥の効果

肥料の種類	用土の種類	施肥10ヶ月後の1鉢当たり平均総枝長			平均枝長
		鹿沼土	鹿沼土+砂	マサ土+ピート +パーライト	
油かす置肥え 月1回		29.4cm	37.3cm	50.7cm	40.7cm
油かす20g/20ℓ 混土		19.3	21.5	25.4	22.4
油かす40g/20ℓ 混土		26.4	31.7	43.7	34.2
油かす80g/20ℓ 混土		22.2	29.9	24.0	27.5
コーティング肥料15g/20ℓ 混土		28.6	29.9	44.6	36.8
コーティング肥料30g/20ℓ 混土		38.4	32.6	27.5	31.6
コーティング肥料60g/20ℓ 混土		40.6	43.8	46.9	41.8

表二 サツキ(暁天)に対する施肥の効果

肥料の種類	用土の種類	施肥8ヶ月後の1鉢当たり平均総枝長			平均枝長
		鹿沼土	マサ土+ピート +パーライト	マサ土	
油かす置肥え月1回		15.4cm	27.8cm	19.3cm	20.8cm
油かす20g/20ℓ 混土		9.4	21.6	15.3	15.4
油かす40g/20ℓ 混土		12.2	21.8	14.5	16.2
油かす80g/20ℓ 混土		11.1	29.0	14.3	18.1
コーティング肥料 60g/20ℓ 混土		26.7	72.0	79.3	59.3
コーティング肥料 90g/20ℓ 混土		26.3	71.6	62.4	53.4
コーティング肥料 120g/20ℓ 混土		39.5	88.7	38.9	55.7

を用いた場合、60g/20ℓが限度で、普通の用土を用いたり、灌水量の多い管理方法をとる場合には、より少ない量の混入が適当と思われる。

サツキの場合

一方、サツキの場合には、排水のよい鹿沼土でも比較的排水が悪く、常に、ある程度の水分が保持されているマサ土を用いた用土でも、ともにコーティング肥料の効果は高かった。

特に、混合割合が2:1:1になるように、マサ土・ピート・パーライトを配合した標準培養土においては、苗の生育は非常によく、その肥効は、夏頃まで持続するように見受けられた。また、鹿沼土においても、油粕施用区の2~3倍の生長量を示した。

サツキの場合は、鉢上げの時期が11月4日で、遅い時期であったためか、翌年おそくまでコーティング肥料の肥効が続き、冬期間中に肥料の流出した油粕施用区との差が生じたとも考えられる。

また、マサ土単用区で、コーティング肥料20ℓ当たり120gr混用した区では、障害がみられたので、比較的肥料に強いといわれるサツキの場合でも、排水の悪い用土を使用する場合は、90gr以下に混入量を押える必要がある。

以上の試験の結果、コーティング肥料を、鹿沼土、あるいは物理性のよい培養土を用いたクルメツツジ・サツ

キの盆栽育苗苗栽培において、秋の鉢上げ時の元肥えとして利用できることが明らかになったが、土壌への混入量については、クルメツツジとサツキでは適量が異なり、また、土質により、あるいは灌水の量により、肥効が変わることも考えられるので、正確な量の施用が望まれる。

規模拡大がぜひ必要

80年代の農業、農政審が中間報告

1980年代のわが国農業のあり方を検討してきた農政審議会(会長・川野重任東大名誉教授)は8月30日、これまでの検討結果を管理した形で中間とりまとめをし、渡辺農林水産相に提出した。これによると、①最大の課題である生産規模拡大のため、農地法の規制緩和などにより農地の流動化をはかる。②財政負担の増加をもたらしている価格政策の総合的見直し。③生産と生活環境の一体的な整備のため、農村整備長期計画づくりをする。④外食産業を中心とした食品産業に対する行政の強化などを強調していると云われるが、審議会は10月に再開し、今回の論点をふまえ、日本経済の中における農業の位置づけなどにつき総合的な検討を加え、12月に中間、来年3月に最終的な結論を出す予定と云われる。